

月刊

語学のスズメ新聞

6月号

モットー!!!

みなさん、こんにちは！いかがお過ごしでしょうか。今月は私から少しニュースがあります。実は私 Chiko ですが今月から半年イギリスへ行って日本語教育のトレーニングを積んでくる事になりました！この決断をするまで色々考え、決めた今も若干振り返る事はありますが、人生2回目の留学、思い切って学んできたいと思います。やはり誰にでも迷いや、悩みいろいろあると思いますが、今回この私のモットーである言葉を心の中でよく唱えました。大好きな言葉なのでみなさんに是非ご紹介したいと思います。

Life is short, break the rules, forgive quickly, kiss slowly, love truly, laugh uncontrollably, and never regret anything that made you smile.

Twenty years from now you will be more disappointed by the things you didn't do than by the ones you did. So throw off the bowlines. Sail away from the safe harbor. Catch the trade winds in your sails. Explore. Dream. Discover.

- Mark Twain

人生は短い。ルールに縛られるな。速やかに人を赦し、接吻はゆっくりと。心から人を愛し、腹の底から笑え。そして自分に微笑みをもたらしたものを全てに後悔するな。

20年後人はやった事よりやらなかった事を悔いるものだ。だから綱を放ち港を出、帆を揚げ風を捉えて、探検せよ、夢見よ、発見せよ。

-マーク・トウェイン



みなさんがモットーにしている言葉はありますか？この言葉を書きながらなぜか少し泣きそうになってしまった私ですが、この言葉を胸に、自分らしく精一杯頑張ってきたと思います！皆さんと来年元気な笑顔で会えるのを楽しみにしています！(あちらから連載します、笑) Go for it!! Chiko

第5回(中篇) 喜多川泰の親学塾 希望の種をまこう

2月21日、喜多川泰の第5回親学塾に行って来ました。この講座はもともと喜多川氏が代表を務める学習塾『聡明舎』(横浜市瀬谷区と大和市にある小中高生向けの進学塾)で掲げる「生きる力を育てる教育」を行うための保護者向けの講座でしたが、この講座の評判が高く学校の先生方や他の地域の保護者からも受講したいとの声を受け、2011年から一般向けに全国で開催されるようになった講座です。親学塾のコンセプトは「大人が楽しく学ぶ機会」。語学力UPにチャレンジする皆さんにもお役に立つと思われ講座内容の概略を小林がレポートして参ります。文中の「僕」は喜多川泰さん本人。斜体の文は小林のナレーションです。第5回目の親学塾は「希望の種をまこう」というテーマについての話でした。前中後篇の3回に分けてご案内いたします。今回は中篇となります。

前回のまとめ 他人というのは自分を映し出す鏡です。まず人を変えようとするのではなく、自分が変わることで、自分を取り巻いている世界、自分を写していく世界がどんどん変わって行きます。大人たち自身が学びを楽しんでいく人間になれば、子供も楽しんで学んでいけるようになるのです。では僕たち大人が学んでいくきっかけはどうやって作っていくのか？それは魂の震える生き方に出会うことです。そういう人たちは夢の力を大切にしている、そういう人に触れると、心が熱くなって「自分も！」っていうふうになるのですが、「現実問題、自分は…」と考えるとなかなかそこまで夢の力を大きくできなかつたりします。つまり夢の大きさと行動するかどうかが決まるのではなく、嫌なことはどんな手を使っても避けようとするのです。そして、その一番いやなことが避けられるのであれば、どうしても手に入れたいものなんか手に入らなくてもいいと考えてしまい勝ちです。この人間の行動原理を知っていれば、自分の中でどうしても手に入れたい未来に対して、自分の中でどうしても避けようとしているものが何なのかを考えた時に、果してそれはその未来を手放すのに値するものかどうかを判断できます。判断が出来たら次は、どういうふうにして変わっていくのかということになります。では早速、中編を見てみましょう♪

良き習慣を身につける よりよく生きるためには、より変わり続けるしかない僕は思っているんですね。ですから、どう変わるかっていうことなんですが、これは良き習慣を身につけるという一言に尽きると思います。いい習慣を手に入れるということです。今よりもよりよい自分の人生になるために、今の自分がないより良き習慣を1つ手に入れば、必ず1ついい人生が待っていると思います。それは何なのかっていうことは、もちろん人によって違うと思います。今の自分の生活っていうのを見直してみると、今の自分の生活の中にはない自分の人生をよりよくするための習慣、これを1つ手に入れたら何だろうっていうことを自分で考えるしかないと思うんですね。自分で考えてみて、「ああ、この習慣が自分がないけれど、この習慣をもし自分が持つことができたら、きっとよりよい人生になるな〜」って思えるものを僕は手に入れに行く必要があるんですね。ところが(よき習慣ではなく)才能を求めてしまうんですね。素晴らしい才能を。子供たちに対して「夢を持とう」というふうに言うんですけど、子供達の夢って何を土台に出来上がっているかという、才能なんです。なんにも言われなければ、みんな才能を土台に自分の夢を持とうとします。ところがですね、自分の才能よりもっと素晴らしい才能を目にした時に、その夢を一つ捨てます。捨てたら今度何を探さかって「夢を持とうね〜」っていうふうに言われるので、一所懸命また探します。何を土台

に探そうとするかということ、やっぱり同じです。才能を土台に探そうとします。だからみんな、自分の中にどんな才能があるんだろうって一生懸命考えます。ところが、自分にはこの才能があるんじゃないのかなと思ったものが、上には上がっているという事実を目の当たりにして、それをまた捨てます。永遠ずっと繰り返される自分の才能探してというのは、ある程度のところでもうちょっとないんじゃないかな、っていうことで捨てていくことになっていきます。自分の才能に対して自分の夢を乗けるのをやめていくんですね。なさそうだっていうふうに気づいてしまう。でも僕は、夢はなかったって大丈夫だって思うんです。それよりもっと大事なものは、目の前の人をしっかりと楽しめる人である、ということです。そして目の前に人がいるのであれば、目の前の人を笑顔にできる人である、ということです。これ、才能でもなんでもないんです。目の前にいる人を笑顔にするっていうことをずっと続けていくと、才能によらない夢が必ず出来上がっています。才能を土台にしていなくてもいいやんやんことっていうのが、どんどんどんどん浮かんでくるようになるんですね。たとえば素晴らしい才能を持って生まれたとしてもですよ、その才能を使う心が育たなければ、幸せな人生なんて約束できないんです。つまり才能は素晴らしい人生を約束してくれないかもしれないですけども、素晴らしい習慣というのは素晴らしい人生を約束してくれる、というふうには僕は言い切れると思います。まずはですね、やっぱり誰かを正す前に、自分の習慣をちゃんと見つめるべきだというふうには僕はいつも思っています。

未来の空白を埋める① 未来っていうのは常に空白で、なんにも決まっています。その空白を僕たちは自分の持っている想像力で埋めています。明日・明後日に対しての想像力でも、人によって何かこう、いいイメージで埋めている人もいれば、悪いイメージで埋めている人もいます。「またどうせ明日もなんか問題あるんだよね



「いい本と出会っても、自分が何もしなければ、出会ってないのと同じだ。いい本と出会ったら、必ず何か行動を起こして、この本と出会ったから今の自分があるという状態を作らなければならない。そうしたときに初めて、君にとっての、その本の価値が決まる」
喜多川泰、スタートラインより抜粋

～」なんて思いながら次の日を埋めることもできれば、「いや明日もしかしたら、こ～んないいことがあるかもしれない！」っていうふうに、良い方のイメージで埋めることだってできるわけですよ。第3回で、現状延長線上の未来をイメージするのは、想像力じゃなくて思考停止に陥っているんですよっていう話をしましたが、単純になんでも想像すればいいのではなくて、やっぱり僕は想像力とは「希望を生み出す力」なんだと思うんですね。もっと別の言い方をすると、

みたいな感じなんですけれども。なんかしばらく～沈んでる子とかもいるんですね。で、そういう子を目の当たりにしたらどうなるかっていったら、やっぱり想像するわけです。学校でこんなことあったんじゃないのかな?とか、家でこんなことあったんじゃないのかな?とか、友達関係とか部活の関係で最近なんかあんまり良くなかったな…とかいうことを、経験と照らし合わせながら想像するんですね。そうすると当然先生ですから、なんかしてあげたいと思います。なんとかしてあげたいというふうに思っても、なかなかやっぱり何してあげていいかわかんないんですね。そこで考えました。そういえば、もしあの子が落ち込んでいる理由がこうなんだとしたら、この1冊の本をあげたら救われるんじゃないかというふうに思います。もしこの本を読んだら救われるかな、立ち直れるんじゃないのかな、というふうに考えます。で考えて、上手くいったら立ち直れるどころか本が好きになるかもしれない…、というふうにいるんなことをイメージするんですね。ああ、じゃあ本買って渡してあげようかな、というふうに思うわけです。そこで本屋さんに行くんですね。ところがその本が置いてないんですよ。売ってない。売ってないので帰ってきて、じゃあどっかAmazonなんかで注文しようかな?とかいろんなことを考えます。いろんなことを考えているうちにですね、行動してもなかなか手に入らなかったら、ちょっと待てよ?!と考えるんですね。あの本手に入らないけど…、これって、手に入らないってことは渡すなってことか???って考え始めると、ん～でもさ～、クラスの中でそーいや、あんな雰囲気になってたのあの子が初めてじゃないよね?!って思うんです。別の子もそういえばこの前悩んでたな。でもそんな時に本あげなかったんだよね～、っていうふうになるわけですよ。本あげなかったんだけど、あそこの親って結構うるさいんだよ。なんでうちの子の時、本もらえないんですか…?みたいな感じで言う人だったりするし…。いや、ちょっと待って。それ言われると痛いな～と。しかもなんかあそこの親、そーいやこの前もなんか、あのうちの子だけがなんか鼻負されてすごくない?!みたいな話をよくいうお母さんなんだよな～と。例えばですよ。あったような顔して言いますが、例えばですよ。でも今の話は全部想像なんですよ。なんにもやっていないんですよ。悩んでる女子のが1人いるという1つの条件があるわけです。で、それに対して、じゃあそれをどうしようかなって考えるわけです。自分がこう動いたらこうなるかな～って。最初、希望で埋めます。希望は何かって言ったら、本をあげるっていう1つの行動をしたらどうなるかなって思うんです。そしたら、こうなっていったら、こうなっていったら、こんな良いことが起こるんじゃないか? 救われるんじゃないか?って考えるわけですよ。

President Obama to visit Hiroshima

Seventy-one years ago, on a bright cloudless morning, death fell from the sky and the world was changed.

「71年前の明るく晴れ渡った朝、空から死神が舞い降り、世界は一変しました。」先日のオバマ大統領の広島訪問での演説はこのような冒頭でした。東洋経済新聞は技術的・経済的發展を成し遂げながらも、戦争という愚行を止められない人類の「絶望的運命」を文学的な言葉と巧みなレトリックでつづった一大叙事詩だった。と書いています。このスピーチを書いたのは、オバマ大統領の側近である38歳のベン・ローズ大統領副補佐官だそうです。ニューヨーク大学の修士課程に在籍し、作家を目指した彼ではありましたが、2001年の911の事件をきっかけに政治の世界に入ったそうです。その彼の演説は色々吟味され、最終的にはオバマ大統領により手を加えられ、あの演説になったのだそうです。演説を聞いているだけで悲惨な映像が目に浮かび、広島、長崎の原爆により命を落とした方々、今も後遺症を抱えている方々への想いがこみあげ、胸がつまりました。スピーチというのは、ただ話したり、原稿を読むだけではなく、そこにその読み手の感情が入らなければいけないのだと思います。これは、仕事でのプレゼン、交渉、すべてのコミュニケーションで言える事ではないでしょうか?

想像力とは「未来という空白を希望で、自分の想像力の中の希望で埋めることができる力、つまり生きる力そのもの」だと思うんです。僕らの未来・将来っていうのは、1年後、5年後、10年後、こう長いスパンで見た時に、もっともつとわからなくなるんです。ここの中にいる人も、僕も含めてそうですけれども、来年の今頃どこで何しているのか、どんな状況になっているのかっていうのを想像して、その通りになってるってまずないと思います。わっかんないんですよ。誰にもわからないです。誰にもわからないので、希望で埋めるのか不安で埋めるのかっていうことが大事になってくるんですね。未来が希望で埋めればどうなるかって言ったらですね、行動を起こしやすくなります。自分は行動を起こしたくなるわけですよ。例えば1年後の未来の自分というのを、すご～いバラ色の未来をイメージしてたらとしたらですよ、行動を起こしやすくなるんです。「ああ、そうなんだ。よしっ、じゃあ自分は頑張っってそれに向けて1歩踏み出そう」という気持ちが湧いてくるわけですね。ところがですね、将来を、未来という空白を不安で埋めてしまったら、多くの人にはできる限り安定を目指します。安定と言ったら聞こえはいいですけども、それは一種の思考停止です。想像したのではなくて思考を停止させるんです。安定を選んだっていうふうに言って、自分で自分に対して言い聞かせることになります。これがですね、実は僕らの日常の中で毎日ちょっとずつ積み重ねられます。1日2日だったらそんなに人生の中で大差はないんですけども、これが10年経ち20年経ち30年経ちっていうふうに長い年月をかけたらどうなるかって言ったら、自分の人生にとって全く違う人生になってしまうと思います。

例えばどういのが考えられるかというのを1つ例をあげますね。僕ら、先生をやっています。学校の先生なんかの方がもしかしたらイメージしやすいのかもしれないですけども、うちの塾では毎日200人の子どもたちが来ます。毎日子どもたちが来るとですね、毎日なんかあるんです。昨日まで笑ってた子が泣いてるとか。すごく普段明るい子が沈んでるとか。前回沈んでたなという子がもっと沈んでるとか。1回だけだったらいいんですけどもね。お腹空いたの?

すね。ところが不安がやってくるわけです。本が手に入らないと、どういうこと? みたいな感じになってくるわけですね。そして、これ動かない方がイイんじゃない?っていうふうになってくるんです。どんどんどんどん不安になります。さらに思い返して、あの時やんなかったの、やっぱりダメだよ。この子だけにあげるってダメだよ。じゃ、これを機会に全部にあげる? いや、そこまでやらなくても…。そしたらあのクラスだけって言われちゃうじゃんね～。去年、先生そんなことやらなかったじゃないですか?! みたいなね。いろんなこと考えるんですよ。こうして、不安に苛まれるわけですね。不安になるとどうなるかって、安定を目指すって言いましたよね。結果、不安が勝ったら何をするか? なんとなくわかりますよね。そうです。「何もしない」です。選択としては「何もしない」です。何もしなければ何もないんです。その子の状態は悪くなるかもしれないです。でも、自分の責任では何も起こらないんです。これが緩やかな悪化なんです。自分が関わっているすべての事柄に対しての緩やかな悪化を選択していることになるわけです。もし自分が安定を選ぶという名目で何もしないを選択し続けていったら、緩やかな悪化が起こるといえるのはわかっているんですよ。でも僕らの行動の原理というのは、先ほど(先週号で)言ったように「一番避けたいことは何か」を考えちゃうんです。お母さんにそう言われたり、クラスでそんな話題になるのはめんどくさいな～と思い、それを避けたいんですね。あそこの塾では鼻負するよ…、なんか特定の可愛い子だけ…なんかどうのこうの…、って言われるようになるのは大変なんですよ。それだけは避けたいと思ったら、ちょっとでも良くなる1冊の本をあげるという、単なるその行為すらやらなくなるんですよ。どうしても手に入れない未来よりも、どうしても避けたい未来の方を優先してしまう可能性があるというのはそのことですよ。大した例ではないですけども、実は僕らはそういう選択を日々やっています。

続きは次号で♪まとめ:小林義和

ここで私が言いたいのは、英語をただの文字として読んでいませんか? という事です。こちらの意思をなんとか伝えようとする気持ちがあれば、少々発音が悪くても、聞き手というのは耳を傾けてくれるのではないのでしょうか?

最後にオバマ大統領の演説の最後の部分を載せておきます。**The world was forever changed here, but today the children of this city will go through their day in peace. What a precious thing that is. It is worth protecting, and then extending to every child. That is a future we can choose, a future in which Hiroshima and Nagasaki are known not as the dawn of atomic warfare but as the start of our own moral awakening.**

「世界はこの広島によって一変しました。しかし今日、広島の子供達は平和な日々を生きています。なんと貴重なことでしょうか。この生活は、守る価値があります。それを全ての子供達に広げていく必要があります。この未来こそ、私たちが選択する未来です。未来において広島と長崎は、核戦争の夜明けではなく、私たちの道義的な目覚めの地として知られることでしょう。」 それではまた～。Rie